

教育長室だより

第 30 号

2021.11.24

冬に入ったことを実感する朝夕の寒さです。学校は2学期後半にさしかかり、新型コロナウイルス感染は落ち着きを見せている中、ほとんどの学校で修学旅行や遠足を実施することができました。

さて、今回は「令和の日本型教育」という話題です。

○

先日、「市町村教育委員会オンライン協議会」という全国規模の行事がありました。午後半日かけての会でした。文科省から施策の説明があった後、基調講演では特別支援教育の研究者からの講演があり、たいへん参考になりました。最後に、全国からの参加者が小グループにわかれて協議する時間がありました。わたしが参加したグループのテーマが「令和の日本型学校教育における子どもたちの学びの在り方」というものでした。欠席者もあって、遠野市（岩手）、茂原市（千葉）、長岡京市（京都）、神崎市（佐賀）および本町の代表5名で協議しました。本町以外はすべて都市部の教育委員会でした。比較的人口規模の近い自治体でグルーピングしたようでしたが本町より人口の少ない市も二つありました。

○

「令和の日本型学校教育」がテーマなので、話題がGIGAスクールの進捗状況などに偏ることを危惧していました。司会役が当たっていたことを幸いに、今回のGIGAスクール構想などの授業のデジタル化について、なるべく一歩引いてデメリットも含めた議論になるように努めました。メンバーは教育長3名（ほぼ同世代1名とやや若手の1年目の方とわたし）、教育委員2名（経験豊富な年長の方と比較的若手の方）でした。年代によって意見が違うことを想像しました。

○

結論から言えば授業でのICT機器の導入についてはデメリットにも配慮が必要だというご意見が多く見られました。国の方針で短期間に導入することになった一人1台端末ですが、まだ全部に行き渡っていない自治体もあり、その導入の苦労話もあるかと思いましたが、それ以上にそのメリットと、デメリット（配慮事項）についてのお話を中心となりました。

タブレットの使用自体を目的化せず、あくまでツールとして使用することを力説される意見、従来の個々の教師の授業技術がないがしろにされないことを望む意見など、機器の導入への心配の声も少なからずあった中、少し若い世代からは、これからの世の中を生きていく上で、ICT機器の利用は不可欠だという意味で導入の成果に期待する意見もありました。

○

どの意見も共感できるもので、わたしとしては聞きたいことに関する意見を聞くことができました。授業へのICT機器の導入は時代の流れとして当然であることはその通りだと思います。が、こういった議論、すなわち導入の意義やそれに伴う授業の変容についての議論は、根本的に重要な問題であるはずですが、それで様々な情報にアンテナを張ってきましたが、これまでこのことに関する議論の広がりがなかったように思い、気になっていました。今後あらためて問題になってくるだろうと考えています。

○

それにしても「日本型学校教育」というものはどうとらえれば良いかということについては、今回は時間の限りもあり、議論にはなりません。アセアンや中東の新興国でアジア諸国からはこの「日本型学校教育」が注目されているそうです。

この場合の「日本型学校教育」はどのように理解されているのでしょうか。エジプトは学級会や清掃、日直などの特別活動を重視した小学校を次々と開校していると聞きます。サウジアラビアでは「道徳」をモデルにした授業が導入されているそうです。「日本型学校教育」は教科の指導だけでない全人的な指導を行うことで『生きる力』を身につけさせようとする教育、あるいは「知」「徳」「体」の概念を合わせた全人教育として高く評価されているのです。全人教育を目指す初等教育と専門知識や技能を身につけさせる高等教育の組み合わせを指すこともあるようです。また、研修を核とする教師教育や授業研究も注目され模倣されてはじめていると聞きます。

○

国によっても違いが大きいといわれる海外の諸国の学校教育については断片的にしかな知識がないので、日本型学校教育の特徴をはっきりとはつかみきれませんが、先の新興国への「日本型学校教育」の輸出に関する情報から考えると、全人教育を目指して教科学習以外の様々な領域の指導が行われていることを特徴ととらえていると考えます。この「日本型学校教育」を「令和型」に変えていこうというのが、文科省の言う「令和の日本型学校教育の構築」の意味するところだと思われます。

○

とすれば、急速な学習のデジタル化ばかりをクローズアップするのではなく、今の子どもの実態から課題を見定めて、これまでの教育課程を見直すことが大切だろうと思います。

まったく“あたりまえ”の議論になりましたが、こういう基本の構えが不十分になりがちだと感じる昨今です。

○

まずは教室環境や授業自体のデジタル化の目標と方法についてゆっくりと考え試行していくことから始めたいものです。